



時代を拓き 世界に貢献する人を目指して

Global View

2019年6月28日 Newsletter 第58号 仙台白百合学園中学・高等学校 国際教育部

「誰の上にも太陽は昇る」

Sr. 吉田 めぐみ(宗教科)

太陽が音もなく昇るのを観ているとき、無心になっています。
でも一度、太陽が昇るときに「どーん」とお腹に響く太鼓の音が聞こえました。
そのとき、太古からずっと日は昇る営みを繰り返しているのだと気づきました。
悠久の時の流れを感じたものです。

ガリラヤの丘の上に座ったイエスは、集まってきた人たちに語りかけます。(マタイによる福音書 5:43~48)

⁴³「あなたがたも聞いておるとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。⁴⁴しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

⁴⁵あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。

⁴⁶自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。(…)⁴⁷自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるか。(…)⁴⁸だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

イエスの時代も現代も同じで、民族や宗教や身分をあげつらった差別があり、男尊女卑や官尊民卑の風潮、反政府勢力のテロ活動、管理主義や拝金主義、大きな経済格差や人身売買があったようです。イエスのもとに集まってきた人たちの中にも卑屈さや怒りを抱えている人がいたでしょう。息苦しさを感じていた人たちが大勢いたことでしょう。

そういう人たちに、イエスは「昇る太陽を見てごらん」と言っているのです。悪人や善人といって分けずに太陽は昇り、天真爛漫に私たちに「おはよう」と挨拶してくれているのです。私たちが気づこうが気づくまいが、挨拶を返そうが返すまいが、何も気にせずおおらかに太陽は私たちの上に昇ります。自分がその昇る太陽になってみようと思いましたが、誰にでも挨拶できたでしょうか？いえ、気に障る人や受け入れがたい人たちのことが目の前にちらつき、無理だ、と思ってしまう。そうです、秘訣を聞き逃すとそうなります。イエスは、太陽を昇らせるのは天の父だと言っていました。天の父に私という太陽を昇らせてもらいましょう。些事に惑わされる次元より遥かに高い次元に心が飛翔し、イエスのように誰とでもおおらかに挨拶ができるでしょう。

この「昇る太陽」のおおらかさ、自由さが、カトリックの本来の意味、すなわち「いつでも、どこでも、だれにでも主の愛を届ける」ということでしょう。1892年に仙台に派遣されてきたスールたちと一緒に仕事をした人々の気概はそこにあります。「いつでも、どこでも、だれにでも、主の愛を伝える」生きざまです。大きな声や甘言に惑わされず、声なき者の声、小さな声に応える気概です。直面する困難を恐れて何もしないという選択肢は無かったでしょう。「はい、私がここにいます。私をお遣わしてください」と応えたスールたちは知っていました。「主と共にあれば越えられないもの、克服できないものは何もない」ということを。その精神を多くの人々がこれまで受け継ぎ、人類社会に奉仕し、今の仙台白百合学園に至っています。そして、この気概はこれからも受け継がれていくことでしょう。そのためにも「グローバル教育」や「国際教育」の基盤に、この昇る太陽の気概を培っているかどうか日々問われています。巷のグローバリズムは自分のところに利益を誘導するために策を弄します。「～に有利」「～社会で求められる人材」という語彙、自分を高めるために他者を貶める言動、それらが世間の「常識」として蔓延しています。ジャンヌ・ダルクの正義の剣で、「ほんもの」を選び取り、「仮のもの」「偽物」を切り捨てることのできる「識別する力」、そして人としての品位を磨いていきましょう。